

# 百合若大臣野守鏡

近松門左衛門作

千早ふる御威勢。脊に千箭の鞆と五百  
箭の鞆を負ひ。臂に稜威の高鞆をはき。  
弓弾を振起て聖庭を蹈んで淡雪の若く嶽は  
らかし。稜威の雄詰神代よりこれ勝閑の始  
にて。悪神惡魔和やかに治まる國も平け  
く。續く平城天皇のオロシ御代の春こそ。  
長閑なれ。地早新玉の四方拜節會樂子小朝  
拜。二日は梅枝臨時客三日四日七日に打  
續き。朝靨大襲白馬の嘶ふる玉の砌には。  
踏歌の杵音もフシ春めき渡り寒からず。  
地就中縣召の除目は吉日に任せ。諸國の  
受領を召さるゝ中に豊後の國の旗頭。太宰  
の太郎和田丸は權の帥に任せられ。去年よ  
り在京勤めしが仰下さるゝ仔細あり。甲冑  
弓箭を帶し出陣の立立にて。參内仕れと  
の宣旨なり。そも此の和田丸は房前公の立

孫。精兵神武の良雄。都には田村丸筑紫に  
は和田丸とて。牛角兩輪の弓張月雲居の庭  
も照渡る。錦革の腹巻殿の松等の梅。金銀  
にて裾金物打つたる直垂。生年二十八宿の  
星兜を韋に持たせ。南蠻鐵の鐵の弓烏打を  
四寸ばかり。白き紙にて巻きたるは、大  
將軍の標かや。地頼む股肱の郎等別府の輦  
武者雲足同じく雲住。執權府内の太夫秀主  
が一子。市郎丸秀虎思ひくゝの鎧の袖。花  
も柱も折り添へて南階近く伺候ある。調頭  
の中將仲成を以て仰下されけるは。今度蒙  
古國の夷起つて。新羅百濟を攻動かし。直  
に日本を劫さんと賊船七百艘。對馬の沖  
に來たる由日夜の注進類なり。然れば汝が  
弓勢百人の力を合する由。百合すると書い  
ゆりと訓す。今日より氏を百合若と改め。

假に大臣の官に擬へ。夷退治の斧鉞を賜は  
る條。地西海に押渡り日本國王の。武臣百  
合若大臣と名乗つて。蒙古の北狄一戰に切  
鑿め。天下太平の忠勤を致すべしとの繪言  
なりと宣べ給へば。あつと謹み承り夷狄征  
伐の勅宣は。調兵仗の家に生れし慣珍しか  
らず候へども。氏を賜り高官に擬せらるゝ。  
某事。生涯の面目何事かこれに如かん。某  
未練の弓矢たりとも神國の威光切先に輝か  
せ。攻戦ふ程ならば四夷八蠻が一時に寄來  
るとも。一戰に驅散らし萬里の波に切沈め。  
地天機を安んじ奉らんは百合若が方すの。  
胸の間に候と。フシ詞清しく奏せらる。地徹  
慮殊に麗しく閑院の左大臣冬嗣公。御簾の  
中より錦の袋に込められし。鷹の羽にて矧  
いだる鎗矢一手取出し。調是は人皇の始大  
和の國。天香山に巢を組みし。香取丸緑丸  
といひし雌雄の鷹の羽。誓余彦算。東の夷  
退治の時。雄鷹の香取丸にて甲矢を矧き。  
雌鷹緑丸にて乙矢を矧き。地大敵を滅し神

武天皇と仰がれ。百王の守と違されし。然れば夫婦一手の矢夫を慕ひ妻を慕ひ。假令所を換へ置いても遂には一所に廻寄る。不思議ありとの傳なり。則ち甲矢を御邊に授け乙矢は帝都に止めらる。此の片矢を身に帯し千里の海山越ゆるとも。雌雄の鷹の契によつて。追付け目出度く凱陣との。宜旨なりとて賜ひければ百合若御階に進寄り。三度拜して頂戴あり、フシ麻にこそは收めけれ。勇氣に募る猛將に稀代の武運を添へ給へば。龍の水を得たるが如き勢にて。夫れ忠臣は天下の爲門を過ぐるに我が家に入らずといへり。宿所へ歸らずこれより直ぐに發向せん。軍奉行は別府兄弟。扱市郎丸秀虎は其の儘跡に残るべし。軍の供に外るゝ事無念とばし存するな。汝が父の秀主が老病甚だ重しと聞く。乳人なり譜代なり國の柱要にて。百合若が爲にも親同然我に代つて看病せば。戰場に先馳して。如何なる分筋力名の忠節にま優るべ

し。先づ本國へ早馬立て軍兵の催促せよ。先陣後陣の手配は敵によつて轉化する。島夷の軍術何事かあるべき。軍は互に船戦と覺えたり。先陣に輪船を立並べ。水障を湛へ敵の火矢を防がせ。射手船には一枚楫突立て、武者走を高く上げ。船筏を二行に列ね官船に竹束つけ。螺鈿鳴らし攻鼓水底を轟かし。鳥船に風切らせ懸引自在に漕過し。敵小船と見るならば投槍投銃。飛鉤を打掛け。く乗沈めて、フシ打つべし。大船と見るならば脇突船を押懸け。敵船を打碎き。漂ふ所を熊手かけ。受切り下切り壁し。勝利は案の内なるべし。はやお暇と奏す器量骨柄類なき。天晴弓取大將やと御簾も几帳もざゝめき渡り。月卿雲客一同に、フシあつと。感じて在します。御感の餘天盃を下さるべしと。十二一重の袖の香も。長柄の饒子女官の酌。御土器を楕圓に、フシ載せて寄添ふ欄干に。地冬嗣公進出で。是は立花と申す上童中一の美

人。逆徒を滅し歸洛の後。御邊が妻に相具せよとの御氣色なり。武勇に猛き鬼百合も情にひげや姫百合と。敵れ給へば百合若も。勇む鎧の袂百合。返すくも身の響名も鷹の羽の夫婦の矢。心の的に立花の妻をも得たり幸も。得たりやをうと手應の。春の。門出ぞ。三思、遅しき、フシいで其の頃は。弘仁元年庚寅正月吉日。まだ春寒き雪霰花の吹雪の朝風。旗指物を吹塵かせ馬物具の色々に。霞を染むる勢は海を堰き河を割き。巖をも砕く山崎や、フシ開戸の院に着き給ふ。牛頭天王の拜殿にて幣奉り本國の。宇佐八幡を遙拜あり。願はくは神明擁護の門を開き。和光利生の徳を垂れ蒙古の賊民速に。天誅を加へ百合若が。矢先にかけてたべと頼みをかけて頼もしく。心の氷解けそめて谷の戸出づる鶯の。聲に誘ふ睡眠のオクリふらり、くくと睡らるゝ。何や是は居睡つた。なんと駭はかゝなんだか。常に見馴れぬ内裏上臈お公家様に参り

會ひ。人柄つくつて氣が草臥れ眠たうて目が醒めず。我は此の拜殿にとろく〜と目睡ん。別府兄弟も休息し軍兵どもも憩ませと。宜ふ内も片眠、鼾の聲も高欄に。鎧の袖を片敷きてフシ前後も知らず臥し給ふ。別府の雲足御小袖着せ參らせ。御目醒めて此方より合圖の貝を吹く迄は。何方にても諸軍勢心任せに休息あれ。我々も一睡と。雲澄諸共瑞籬にオクリ敷皮、敷かせ臥しにけり。フシ廻る、地色を深くも塗笠に。年の頃はひ十七か葉竹草履も穿き馴れず。緋の袴着た足取に、オオツリ山路。分くるは御社の。フシ詣と見ればさもなくて。拜殿に立止り。ム、ム、是は百合若様。自らこそ立花上より仰の縁組。否あらうとは存ぜねども直に言葉も交したう。お暇申し参りたりサア擦つてお目を覺しましよ。具足とやらいふ物を手に觸れたは今が初。堅い冷い強ばつた何處から肌へ手を入れう。背中搔くにも搔かれまい寢返を遊ばす時。灸が

擦れうなう〜と。フシ起せど〜目が醒めず。ア、辛氣標つて起しても。具足越は應へまいいつそ抱いて寢て起さうと。衣引上げしがいや〜、具足鎧うた侍と若い女子と二人寢て。傍から人が笑はうがア、儘よ。地若も咎むる人あらば祭の練茶の女房とフシいうて退けうとひつ被く。此の聲をや聞付けけん別府兄弟、領きあひ。そろり〜忍寄りあれを見よ雲住。御癖の長癢の死人同然。斬るも突くも儘なればいざ一討に仕舞うてのけ。標し置きたる軍勢、鯨波をどつとつくりかけ。地八方より取巻かば大將はなし誰が味方やら敵やら。百合若の家絶えて跡を繼ぐべき甥子はなし。府内親子を打殺し。豊後豊前の大將は我々兄弟。日頃の念願成就ぞと嬉々笑ひ差足し。衣引上げれば立花。ア、悲しや狼藉者。起合ひ給へと揃起す。アヤア聲立てまい〜。彼奴は昨日の立花鎧に女の肌膚る。地磁らははし忌々し高聲せずサア歸れと。太刀

振廻せば設方なく。命限りに逃げ給ふ。フシ危かりける次第なり。サア邪魔拂うたり心易しと差足し。兄弟太刀を抜放し。討たんとすれど威に壓され。フシ戰々慄ふばかりなり。地エ、何が怖い事思ひ詰めたる本望の。寶の山とは只今ぞと胸を定めて兄弟は。枕を踏んで兩方より斬付けんと振上ぐる。地百合若むつくと起上り二人が首筋引揃み。弓手馬手へかつばと投げ拜殿にすつくと立ち。アヤア冥加知らずの逆臣め。汝等野心ある事は疾くより知つたれども。思ふ程奉公させ使ひ枯らして其の後に。首を刎ねんと思ひしに寢首を狙ふ小癩者。地ヤア草履取ども馬取ども。別府兄弟引出し首討つて棄てよとて。悠々と立ち給ふ別府も流石武士にて。オオツリ、廻る、上からは主従はこれ迄。御首を賜らんと飛掛つて兩方より。弱腰取つて締付けたリヤアやさしや物見せん。只一討は易けれども出陣の清淨劍。下人手討の血を塗つて軍神の畏あり。首引抜いて

は拜殿を礎すも當社の憚りあり。一足に蹴殺してのけんずものと取つて伏せ。ゑいや／＼と蹈む足は拜殿の板敷に。鑿々たる音ばかり。二人が形は何所とも、フシ播消す。

如くなかりけり。地百合若は茫然と野干の業かと氣を治め。心を澄ませば齋壇の下に。別府兄弟高枕、魔れ懼え臥したりけり。地ハア、扱は夢か常々彼奴等兄弟を。心得難く思ふ事を夢に見る。さりとて夢は可笑しいもの別府々と召さるれば。兄弟はつと目を醒し拜殿に走出で。主君の顔を屹度見てわぢ／＼慄ひ色違へ。御慈悲に一命は御助け下されかしと。誰問はねども身の上のフシ白狀。こそはあさましけれ。地百合若扱は實夢にて。彼奴が腕にも徹したりと分別し。地ム、何を申すぞ。若し夢でも見たかとあれば。雪足はつと本心つき。ハア、思へば夢にて御座候。扱も／＼不思議かな。府内の太夫親子の者野心を起し。君のお寢間へ忍び込み。内裏上臈立花を追散らし。

御首取らんと致せし所に君御目を覺され。何が日頃の御力。取つて引伏せ踏殺さんとなされしを。我々詫言仕ると存する間に夢覺むる。地是ぞ當社の御告府内の太夫に御油断ばし候など。我が身を外にぞ偽りける大將動する氣色もなく。地ヲ、汝が夢に能く似た夢某も見たれども。夢に任せて大國の賞罰は行はれず。總じて悪人の眼は面にあり智者の眼は胸にあり。地包まば包め我が手勢十萬騎が心中の。善悪は百合若が胸の鏡にあり／＼と。照らし見るこそ面白けれ。今日は珍しう。馬の口取れ兄弟と胸引寄せゆらりと乗り。鑑の鳩胸兄弟が眉間先に踏反し。静々と打ち給ふは天晴。不敵の三重勇士なり。フシ府内の太夫。秀主は。老體に大病うけ。鹿谷の館に。フシ養生加へるたりしが。地主君は蒙古誅伐の。大將蒙り百合若といふ氏を賜はり。大内より西海へ直に打立ち給ふと聞き。年こそ寄つたれ平生ならば。眞先駆けて島夷の一陣に打

破り。日本の老武者に鬼神ありといはれんものを。エ、腹の立つ病めと。枕を敷き咳上る痰火は胸に滯りステテ病症重くぞ見えにける。地市郎丸秀虎立歸り。御御心持變る事も候はぬか。扱主君の御恩の有難さ。汝が父は國の柱要にて我が爲にも親同然。館に残つて看病し今一度本腹させば。軍の供の功名には勝らんとの御説故。地道より罷り歸りたり緩々御保養遊ばせと。枕に恁れば秀主むく／＼と起き。脇息押取り秀虎をさん／＼に。打伏せ／＼叩伏せ。苦しき眼に涙を流し。エ、情なやあさましや。君君たらずとも臣以て臣たるべしといふ。地夫には引換へ君君たれども。臣臣たらずとは汝が事。老に惚れて病つき、在るにかひなき秀主を國の柱要と。君大切に思召すは何故と思ふ。地數度の軍に名を顯し。命は君にフシ捧げし故。地此の度の合戦は異國迄の晴軍。地日本の弓取百合若が執權。府内の太夫親子とて一騎當千の勇者

と。異國の記録に止めぬさへなんほう無念口惜しき。地されども己れが御供して異國本朝に名を上げば。むだくと床に臥し病で死する親の名も。あけてくるると嬉しさが薬よりも薬となる。今日は心も清しくて氣力もありしもの。親の病の毒薬ぞや。惣じて武士の掟にて。家を出づる時其の妻を忘れ境を離るゝ時。其の親を忘れ刃を取つて其の身を忘るゝといふ。殊に別府兄弟は油断のならぬ痴者。味方の内に怨敵あり斯様の心もつかずして。親の看病孝行願望の中に竹の子出で。黄金の釜を掘出せし。孟宗郭巨に優つても。侍の子が出陣に外れて孝行立つべきか。不孝者不忠者とスエテ齒嚙を。なして泣きけるが。己れが兄の悪文治秀景めは。好色故に勘當し今は行方も知らねども。己れは父が弓矢にも劣るまじと頼もしく。地守育てたるかひもなく。二人の子は持つたれども。一人も持たぬ同然ぞや。逸物の猫の子は必ず鼠取るものぞ。

猫に劣つた悴め兄同然の勘當と。枕刀をおつ取り。するりと抜いて脇息を二つにさつと切割つて。是を見よ此の脇息が二度合はぬまつ此の如く。親子の縁是迄なりと。涙にくれ踉蹌入れば母は暫と引止め。やれ説言申せくと泣き給ふ。秀虎も涙にくれ君の御意の有難さに前後を忘れ候。只今迫付け軍の御供仕らん。勘當御免下されと手合すれば。はつたと睨み。弓矢取る身の軍に立つが。珍しうて勘當を宥さうか。地狼狽者とぬめつくる然らば討死仕らんせめて無き後に勘當御免あるべきか。同ヤア敵に打たれて死したると何を藥に許すべき。地ム、然らば好き敵と引組み。分捕功名首數取つて候は。其の時御免あるべきか。何とぞ御免受ける様を教へてたべ。一つは親の御慈悲とスエテ聲を上げて泣きければ。地父もさながら涙にくれやれ。これ此の切割つたる脇息も。接ぐは漆の手柄ならずや。手柄次第にッ接がるゝぞや己れが

手柄に今一度ついで父が起臥の。身を轉けよと泣き給へば。ア、有難し忝し。親子の縁の脇息を手柄に接けとの御教。心も開く花漆はや御殿と出でけるが。存命不定の父の顔はや限りの涙を袖に。拭ひ漆と塗り隠し眞先駆けて一番首を。せしめ漆と勇みをなしもみに。揉んでぞ。三重、急ぎける。ッ折しも其の日は。順風にて大將を始とし。和田の岬を出船の八十島遠く漕ぎはなれ。別府が乗つたる船ばかり。今纜をとくくと。ッ既に錨を揚げにける。地秀虎嬉しく大音あけて。只今の出船は別府殿と見受けたり。府内の市郎丸秀虎。恐父が病氣によつて御座船に後れて候。暫く待つて乗せてたべと扇を舉げてぞ招きける。雲住かつらくと笑ひ。ヤア法を知らぬ侍かな。馬でも船でも戰場は一二を争ふ習ひなり。待つてくれとは扱も目出度いお侍と。地船中どつと打笑ひ、シ構はず出せと罵りける。こは情ない別府殿。先陣後陣

を争ふは敵に對する時の事。親子遁れぬ義

に逼り乘後れたる傍輩の。一世一度の御無

心と大聲あけて喚ばはれども。いやこの方

は本侍。戰場急ぎて功名せねばならぬ者。

何れもは寛々と後からく。地サア出せと

櫓を早め漕出す。秀虎今は堪へかね本侍

の出船を。止めて見せんといふまゝに磯打

つ浪にざんぶと入る。水手櫓取艦舳に走り

帆を八分に引掛けて。フシ寄付けじとぞ揉う

だりける。地秀虎聞うる強力にて波を蹴立

つて三丁ばかり。矢を射る如く渡り來て船

の纜むんずとつて。磯に戻れと引戻す。廿

五反の東海道。金物盡に七百餘騎四十八挺

櫓を立て。舟は足入り風はもつ引戻せば

ハッ押出し。押出せば引止めゆらりと揉

合しは。小島の動くに異らず浪と風とを相

手にして。秀虎力や優りけん元の浅みへさ

つゝ。さらさらさつと引戻し乗らん

とすれば船中より。鎧突出し熊手に懸け

フシ打止めんとぞ弄きける。別府が郎等雲

御跡慕ひけり。

山九郎七尺豊の大男。ひらりと飛下り秀虎

に押並べてむんずと組む。さしたりと片手

に引寄せ。汝如きの下郎奴が秀虎が手にか

かるは憚り千萬。さり乍ら主の別府が名代

ぞと。上帯揃んでゐいやつと。三段ばか

り彼方なる岩角に打付けられ。頭微塵に打

つ波の。フシ底に沈んで失せにけり。別府今

は敵はじと藻切刀をおつ取り延べ。纜ふ

つゝと切りければ風の機に彈かれて。船は

沖へ十町ばかり。帆びらき打つて走りしは

鳥の伸羽の。三夏へ如くなり。地秀虎獅子の怒

をなしエ、別府恨めしき。最前舷ひつく

り返し悪魚の手向となさんずもの。浪も風

も心あらば忠と孝とを感心し。船寄せてた

べ戻してたべ龍神は何所にぞ。風の神はな

きものかと海に駈入り駈上り。濱邊の眞砂

蹈立て。く蹈鳴し。天に恨を吹立つる鯨

の息や涙の雨。眼も眩るゝ日も暮るゝ遠寺

の鐘を導いて。知らぬ山路に分迷ひ君の。

御跡慕ひけり。

一人。蹴躓きたる石の角あ痛しことと驚ら

## 第二

地府内の太夫が嫡子悪文次秀景は。先年父

が勘當うけ昔思へば好色は。此の身の暇か

世の中を走りかねたる小笹原。有馬上下の

駕籠の棒。角兵衛と名は變へたれど。フシ角

ひのとれたる男なり。地相肩の忠助息杖かた

けてなんと角兵衛。旅人は多けれど駕籠借

らうといひ手がない。寅の年の奇特に。世

間の人の道が達者になつたけなといひけれ

ば。いやさうでもあるまい。去年は丑の年

なれど飛脚は何時も走り詰め。申の年に當

つても不精のものは不精で通る。酉の年に

も日の暮に目が見える。さり乍らその親

父ばかりは七十六であの氣丈。午の年に當

つたら。フシ太鼓打ちやろと笑ひける。地あ

れく其處へ見える女房衆町人でなし武家

でなし。賣物氣も離れた合點が行かぬとい

ふ内に。いつ旅なれぬ上藤の錦の袋に入れ

たるは。太刀か刀か用心の悪いも知らず唯

一人。蹴躓きたる石の角あ痛しことと驚ら

一人。蹴躓きたる石の角あ痛しことと驚ら

へば。邊に充つる伽羅の香を。駕籠遣りませう上藤様。フシ駕籠やろいとぞ申しける。

ナ、駕籠借り度い豊後の國まで乗せてたも。

調はれとでもない。爰は津の國池田。豊後

迄は海の上が二百里。地なんほ豊後豊前で

も直下に見るとは違ひます。行基が山田ま

で召しまして。それから先々お借りなされ

といひければ。ナ、何處までなりとも違つ

てたも。サア乗るぞやと乗らんとすいはぬ

事は悪い。駕籠賃は山田まで錢股ちや御

合點でござるか。地ムムそれはおあし的事か

おあしは持たぬ。京から爰へも緋の袴を代

にやつて乗つて来た。袖に大事の名香あり

琴の爪でも鏡でも。望に遣らうフシ乗てた

もやとありければ。地ムムく優しい忠介

聞いたか。常の人の言はぬ事駕籠籠昇兵利に

叶うた。地末代の語句に名香で乗せませう。

サア召しませサア揚げい忠介と。いへども

更に合點せず。置いてくれ角兵衛。其の様

な花車道具米屋味噌屋に請取るか。遣りた

くば一人やれ。有馬の湯女を女房に持つて。女房に掛るそちとは違うて。地コレ此の

足二本で四人口夕飯の代に伽羅嗅がせ。鼻

はよい衆其の下の口が干てはならぬわとッ

シ吹き腹立ち歸りけり。可可愛や譯を知ら

ぬな。汝ばかりが相手か。地お氣遣なされ

な。一人なりと遣りませう。一寸適さぬ戀

と見た。我等も戀故この有様定めし御忍び

難もしやんと下して。相肩呼うて來ませう

といふ所へ。武士ども二三十やあやあ駕籠

昇。地十八九の女錦の袋を持つて此の道へ

來たる由。芥川で聞届けた眞直に申せ。さ

あさあ吐せとあらけなく穿鑿す。ハア今朝

から此處に居たれども。左様の方は通られ

ず。盗人でかな御座るかといへば。ナ、

謂はば盗人同然。豊後の國の大將百合若

蒙古退治の救院蒙り。當春西海へ向はれ

しに一戦に討死し。家ヲ執權別府殿の動き

にて。敵を滅し御恩賞に百合若の遺跡

豊後豊前兩國別府兄弟に賜はり。殊に百合

若に下されし雌雄の鷹の羽。片矢は内裏に

遣されし綠丸といふ雌鷹の矢。別府所望あ

りし所に百合若に嫁せられし。立花と申す

上藤彼の矢を奪ひ落ちたる故に穿鑿す。地

道は一筋今の事を汝が知らいで誰が知ら

う。吐さずは括上げていはせて見せんと。

皆一面に取廻す。秀景はつと思ひ。所以を

聞けば重代の。主君の御事爰ぞ忠義と覺悟

する。地ムム夫は大事の穿鑿。慮外ながら

何れもなんほ取る衆か知らぬが。百合若殿

は大名。地此方衆の分では行くまいと。煙

管くはへて懐手。フ身をのさばつて立ち

居たり。地ヤア知らずば知らぬで濟む事難

言は慮外者。駕籠の内が胡散もの探して見

んと飛掛る。息杖押取り立塞りヤア何處へ

く。地忝くも此の男身過ぎの種の御駕籠。

町人の金藏百姓の田島。武士なれば城廓

同然。地山坂石原滑路。跨け飛越え一橋色

里の四枚肩。一度も不覺の名を取らず。桐

込んだらば、息杖の續かん程けんこ微塵に噴んで。ころりと腰に引つ付けがれんくと一囀に。噴んでのけん寄つて見よとフシ杖振廻し立つたりけり。地こは推参なる駕籠昇め別府が郎黨黒川與藏。手並を見よと打つて懸る心得たりと受流し。太刀打落し杖取直し。疊掛けて打つたるは腕の利いたる三重早業なり。フシその際に。地下部ども駕籠昇出し藤を上ぐればこは如何に。誰が手馴れとも白日の鷹羽杖をつきて睡り居る。是は不思議と立寄れば鷹は怖るゝ氣色もなく。ぱつと羽を起て行く空の千聲。百聲飛鳴して。雲井を西に翔り行く追手の武士は口を開け。雲ばかり見てきよろきよろとフシ都の方へ立歸る。ヤア。是は旦那殿斷落者の行方が知れた。なぜ追つかけさしやれぬ地結構な追手の衆氣息精張つて擧句に。息杖迄戴いて。是が本の犬骨折つて鷹に取られたお侍と。笑うて戻駕籠細工有馬の。宿へぞ三重歸りける。猪名の笹原。そよさ

らに。有馬の湯口来て見れば。老を養ふ龍よりも小オクリ小湯女が。情身の藥心の藥。遇戀の一の湯。フシ馴染めて。ハルフシ重荷を肩に。二の湯かや。色は賣らねど色里も心は。同じ客勤。フシ酒に明かさぬ夜半もなし。地實に湯の山の道連と人も湯桁の數々に。戻る人あり今來るお客。浴衣干すてふ三階座敷思ひの幕懸けて。入るさの月の郡人田舎遠國様々に。小オクリ見舞の鬚籠杉折の。フシ子持ち度いとて。入る上臈衆。地變て御産の帯解の。大百姓の嫁御とや。三年足立ち給はぬは津の國西の宮の人。目出度や今の湯上りは永々の中風病。癒るも道理桑名の衆。右の頬先ふつくりと瘤の出來しは松前衆。浴衣姿の小娘の咽に咳詰め咳が出る。丹後丹波の御客ぞかし。あの老僧は痴氣持比叡の山の出家衆。瘦せて糞れて骨と皮美濃の大垣。手足の筋が教賀の衆癩で胸先。フシ播磨湯。ハルフシ諸國貴賤の。入込も皆本腹で歸るさは。坂迎湯や送り酒。

波湯の樽の口早に。あがれくくくくあがれ上りの衆ならば。土産召せく竹細工籠も品々有馬衆。繪にも及ばぬ名所は。かの楊貴妃の驪山宮も。フシかくやと。見ゆるばかりなり。地大湯女小湯女多き中に分けて名高き松が枝と。元の根ざしは豊後の國濱の市の遊君なりしが。秀景に馴染て主君の不興蒙れば。親子の縁の弦断れて。武士を捨てたる梓弓。フシ居所もなき憂き命。池の坊の湯女となり夫を育む身の勤。スエテ世に味氣無き戀路なり。地中に仲よき小湯女ども。湯口に集りこれ松が枝。隠れて語りし茅の坊の御客は西國衆。そもじに深き思ひ入り。お床の伽が合點ならば身の片付も能い様に。見捨てませいとて誓文立て我々たんとお頼み。男ありとはいひ乍ら駕籠昇さするが見目でなし。我人湯女々勤の身は帯解ぬ傾城。今の無念口惜しさ世帯持つての後藥。地角兵衛愛しか辭いて進じや。言ひ難くば我々がフシいうて遣らん



といひければ、調ア、必ずくあの人へは猶沙汰なし。湯口を勤め座敷へ出で。六十六國の機嫌を取り。地漸う蓄めて宛行へば三日と手には持たすに。人に遣好き振舞好き。女房賣つても遣ひたがる男に聞かせてよいものか。我とても聞きともないとシ耳に手を當てたりけり。地秀景は主君の身の果開捨て難く。松が枝に談合しはや本國に下らんと。胸に折れ込む駕籠の棒投げ捨て、湯口に來り。調ヤア松が枝身の一大事が出来て來た。急に談合する事あり。宿へ歸れといふ顔付。友の湯女ども不思議がり。あの角兵衛は常が可笑しい事いうて。笑顔のよい人ぢやが只事ならぬ顔色。氣遣さよといひければ秀景は南無三寶。色に出では悪しかりなんと。調さればく顔色も變る筈。世間の沙汰を聞かずか。伊勢の國鈴鹿山に鬼神が住んで人を取る。田村丸と申す大將討手を蒙り人大勢備はる。此の角兵衛も備はれ待になつて。明日早

天に御供刀も買ひたし旅用意。今夜中に四百五匁何とぞ借出す其の談合。皆の衆も共々にどうぞ頼むといひければ、調たつた今其方の金遣やる噂。鬼神退治の御供に錢金が入るものか。地何ぞ外に思事語りやくと責めければ。秀景も陣じ兼ねヲ、金銀が無ければ田村丸の御機嫌悪しく。大將巖に腰を掛け。急に借るべき金もなし質種をだに持たざれば。何を工面何を見込に借出さん。身代こゝに洗うたりせめて五兩か十兩か。小判の顔を見る迄は角兵衛が尻を湯の山に晒さんす。フシ喚達如何にと宣へば。地大湯女小湯名打笑ひ。病なしの剽輕とオクリ皆々へ宿へぞ歸りける。フシ人目なければ。地秀景小聲になつてこれ松が枝。只今大事を聞出す。扱も我が君百合若殿。蒙古の戦に討死し給ひ。國は別府に賜はるとの定説。地親の勘當主人の不興武運に盡きたる秀景が。耳に入るは弓矢神も未だ捨てさせ給はぬか。天子より賜つたる百合若

の家名。下人別府に乘取られ草の蔭にて我が君の。妄執も(の)痛はしし本國に馳下り。別府兄弟が首を刎ね。御一門を守立て。兩國を相續せば不孝不忠の重罪も。少しは晴るゝ事もやと思立ちは立つたれども。刀にも太刀にも此の息杖一本。買ひ調へん金銀なし十を九分に仕寄せても。聞き方なき運命やとエテそとろに。涙を流しける。地松が枝悦びヤアそれは必定か。有難や忝や今の御身で侍の。道を忘れぬ思立ち身を棄てさせたも我故なれば。又自らが力にて元の御身になし申さん。太刀刀も金銀も手にこそなけれ。湯入衆のを盗み取り。御世にお出でなされて返せば暫時の借物と。湯口に人の音なひして浴衣々々と呼ぶ聲に。夫禰ははつと身を忍び、シ戸口に隠れ居たりしが。地浴衣の上の深編笠下人に持たせし打刀。木瓜鏢の太刀作九州様の大反。烏帽子たゞきの船鑑秀景見送り。とても盗まばあの刀エ、欲しい事く。喉

が乾くといひければ、あれこそは此方の客。自ら盗むも易けれど、湯入の物を掠めじと。藥師堂の誓紙あり。案内せんと夕月夜更け行く。空をぞ三重へ待ちたる。フシ夜半の鐘の。地落葉山梢寂しく吹く風に。湯口の燈明森々とフシ眠れば人も寝入るらん。地夫婦は時分と三階の襖戸障子開け過ぎて。此の間こそと指して妻戸の此方に松が枝は。お客様。く〜と呼べども夢の浮橋や。鏝外しそつと入り夜着引被く枕許。秀景もや、涙ぐみ顔は見ねども此の刀。差す程の人體如何様由ある勇士なれど。今夜刀を盗まれて昨日は朽ち行く武士の道。我が侍を立てんとて人を捨つるあさましさよ。痛はしの身の上と思へば氣も落ち手も顛ひ。ふるひ〜取る刀三枚鏝の寛きは。鋤杖振るが如くにて。盗を知らぬ本心の。フシそつと差置けばかりなり。地松が枝急いてア、氣の弱い。早う早うと制すれば秀景も胸を据ゑる。此の上は是非もなしもし目

を覺さば一討と。又押取つて立たんとすれば。夜着押退けて寢返りに。すはやと鏝元寛けて。討たんとすればつやく〜とッシ元の寢顔ぞ危けれ。地秀景寢顔をよく見届け持つたる刀からりと捨て。やれよその人かと思ひしに我が父府内の太夫殿。勘當受けしは八年前御病後といひ年といひ。御容顔は變れども天車の家の紋。清見が關の合戦の向疵が印ぞや。懐しの父上やと寄つては見退いては泣き。聲をも立てず平伏してスエテ不覺の涙に。沈みしがフシ冥加に。盡きたる我が身かな。地人こそ多きに親の刀を盗むといひ。只一討にと抜きかけて眞似にも親を討たんとせし。天罰の怖しや死して地獄に墮つるとも。此の罪に相應の地獄はなにかあるべきぞ。起合ひ給は思はずも御首落すは必定。御目の覺めぬ故にこそせめても刀を抜放さず。是も親の慈悲ぞとて。親の寢姿伏拜み〜フシ消え入る。ばかりに泣きふたり。松が枝も涙にくれ此

の頃朝夕お側にゐて。知られず知らずフシ暮せしが。我故の御勤當親子の御縁を切らせたる。科人は外になし慈悲の上から御免あれと。拜みつ泣いつ身を口説き。御無事な親御の顔ばせを八年振りで見事。子の身では十分もしお目覺めて夫婦連。此の體が目にかゝちはスエテ二度の勘當何とせん。地まづお歸りと手を引けば。四尤と領き立歸らんとはしけれども。いや待て弟の市郎丸愛に無きは心得ず。是も君の御供して討死と覺えたり。父は老體誰あつて榮うる別府を討つべきぞ。罪に罪を重ねば重ね御刀を盗み取り。主親の爵位を散せんものをと木綿つけ鳥の。八聲と共に泣く〜も刀押取り次の間に。出づれば父は起上りこりや待て〜と咎められ。南無三寶と秀景は持つたる刀投出しフシ屏風の陰に隠れる。地松が枝わつと泣き出し。さもしい事を致したるお恥かしやあさましや。女のはかなき出来心沙汰遊ばして下されなど。我

が身の科に取直しフシ涙を。流しるたりけり。父も涙をはらくと流し。■テ、見上げた。さすが侍の妻の氣質備つて。夫の科を身に受くる殊勝千萬さりながら。■老の寢覺の目も合はず始終をよつく見届けた。■我が刀を盗んだは嫡子悪文次秀景よ。斯くいうても盗人を咎むるでは更になし。弟の市郎丸も武道の勇みに勘當し。■子を持たぬ身となり果て某は病中。親子三人軍の御供に外れし故。君も討死ましく國も別府に乘取られ。皆これ我がフシ越度なり。■無若き時分は氣も強く義を重んじて勘當し今七旬の老が身は。子より外の力はなくスエテ明暮後悔するばかり。■地時しも盗人入つたるぞ通すまじきと空寝入し。よく見れば我が子なり嬉しやと起上り。勘當有すといはんとせしが待て暫時。■先年彼めに誓文立て侍冥利勘當と。佛神の誓獸されず躊躇ふ内に刀を盗む。ヤア嬉しや枕の刀盗まれては我が侍は癡つたり。武士を立てぬ

上からは侍冥利の誓文は反古なり。■勘當有し亡君の御敵を討たせんと。思ふ心に早まつて氣練く聲を掛けければ。怖れて何所へ斬出でしぞ刀惜むと思ふべき。心の内も面目なや。■干將莫耶が劍でも我が子に何か惜しからん。呼び返して此の刀盗取れ奪取れ。我が身の恥辱は思はぬと聲をばかりに泣き給へば。松が枝も伏沈み。秀景は屏風の陰。親の慈悲心身に應へ。■無理過ぎて歎きしが。■地何時の時を期すべきと御刀盗人。悪文次秀景是にありとつと出で。刀を取つて戴けば。■テ、出来したり。勘當は有したり腰刀を盗まれて。我は町人お事は武士。詞も禮儀も違ふぞや縁御諸共上座へと。我が身は下座に手をついて。フシ咽入りたる嬉し泣き。■夫婦は冥加恐しと。三人自と目を見合せてスエテ泣くより外の事ぞなき。■地無弟が傳へ聞き羨しくも思ふべしと。人の噂我が身の上。年頃積る物語オクリ夜はしらへんと。フシ明けにけり。■地友達の小

湯女どもなうく松が枝。■茅の坊の御客様今日お歸とて。今お幕が懸つた湯口まで来て暇乞しておきや。筑紫大名別府殿弟御。■地廻つて損は行くまいと。フシ口々いうてぞ歸りける。■地サア。天道明らけく親孝行の驗にて。主君の忠義此の時と親子身構へ鉢巻締め。我は今日より町人なり初太刀は汝仕れ。女ながらも松が枝は。武士の妻と差添譲り。其の身は下人が鎧刀に換へフシ忍び勇んで出でにけり。■地案の如く別府の雲住若黨數多打連れ。迎湯までの名残ぞと皆々幕に入る所を。三人左右に一の湯二の湯。戸をばたくと差詰め大音揚げ。■地百合若が家臣府内の悪文次秀景。如何に雲住主君の國を横領の惡逆首を渡して。五逆罪を死逆になせとぞ呼ばはつたる。■地内には驚き膽を消し。たゞ騒ぐばかりにて。フシ出合ふ者こそなかりけれ。■地一の湯を押破り。二の湯の方へ追出せと呼ははる壁に詮方なく。出づる所を戸口に支へ丁ど切つ

ては引出し。礎と打つては切並べ。隣り間に十餘人、フシ茄子を切るが如くなり。其の間に雲住屋根切破り丸襦。飛ばん降りんと狼狽ゆる三人四方に立廻り。降りば斬らんと附廻り争ふ所に雲住が雑兵ども。駈隔つて三人を防ぎ支ゆる其の隙に、裸身軽く逃足も早ての風に雲住は。山に飛入り谷を分け行方知らず落ちてけり。親子夫婦はこれ迄と群る大勢迫散し。湯口を清め勇み行く實に有難や忠孝の。誠の驗有馬山松になりたや萬代の親子の。縁こそ久しけれ。

宮島 八景 三段目

参路も添ひて波の上。立居や現なるらん。是は百合若殿に仕へ申す。市郎秀虎と申す者にて候。扱も頼み奉りし百合若殿は。葦古の軍に討死と申し。又遠き島に存へ御座候とも申し候。爰に殿島の明神は。海を守る御神と承り候へば。一先づ参詣申し夫より海路に赴き。百合若の生死を尋ねばやと存じ候。會稽山の埋木も花咲く春

のあるぞとて。香を尋ね行く鶯の糞ふてふ旅の笠宿も我が身かる人も。フシ我が身の外は友とて。フシ浪にしをる。小夜千鳥。沖の鷗を知邊にて。島ある方へと迷ひ行く。シオクリ憂身の。末ぞ。便なきハルヲ佛も元は。若草の。馬草苜蓿飼ふ。舞防駒の。舍人が涙主従の盡きぬ名残は中々に。人を導くフシ端となり。後世の迷は暗せども。我が身に暗き秋霧や秋の浦々見渡せば雲と浪との色々に。影も美し殿島。誰が教へねど自ら爰ぞと思ひ白浪の。波の鳥居や瑞籬の。和光の影はあり。とステいと。殊勝さ勝りける。市郎九秀虎は。安藝の國殿島に着きしかば。鵝口鳴し幣を取り。ステエ神慮を清め奉り。白木綿褌早振る。祝詞をこそは捧げけれ。護上可。再拜引。再拜。敬つて白さく。抑神慮を清むる事。和歌よりも猶宜しきはなし。其の中にも神樂を奏し。少女のフシ袂。返すも面白や。殊更當社の御神は。波崎羅龍王の第三の姫宮

にて。海上を愛で給ひ此の殿島に跡を垂れ。衆生濟度ましますなり。扱此の殿島は。三國に響ある。八景を表したり。先づ兩は御山山。巖峭高く聳え。嵐迷の夢を破り。麓に人家列つて。世渡る業の品品は。宛然山市の。晴嵐なり引。西は海上漫々たり。沖に泛べる蟹小舟入日の。影と諸共に。揺られ揺らる。波の上。實に漁村の夕照やと。眺に飽かぬ海の面風をよ。くと吹來れば。我も我もと帆を上げて。フシ歸る。釣舟磯近ければ。賤の女童並居つ。ハツ遠浦の歸帆と。フシ打眺め。心慰む折からに。はや寺々の鐘の聲。今日も暮れぬと聞うれば。造りし罪も。散々に是ぞ遺寺の晚鐘と。聞くにつけても殊勝さよ。フシいと。涼しき秋の山。古木巖の肩にかかりしも。東南に滿ちて。霞かゝらぬ夕暮に。フシ月ほのく。明らけく。フシ千里の外迄。限もなく。迷を照らす洞庭の秋の月こそ眺あれ。既に夜も更け靜りて。さも冷々と降る雨に。寛

の水も音添ひて、懸滴る聲の妙なるは、流に  
泛ぶ樂の船。蓬窓雨滴りしかの瀟湘の夜。  
の雨も是にはいかでか優るべき。右手は長  
濱渺々たり。フシ渚に平沙の落雁は、寄來る  
浪に驚きてばつと立つてはさつと下り。群  
れるて遊ぶ風情は海の面もいと凄じし。夕  
の空を見渡せば。雲かとはかり疑はれ。江  
天の暮雪これなりきかゝる靈地に、フシ垂跡  
し。和光同塵ましくして。本高迹下の秋の  
月照さすといふ所なく。化俗結縁の春の花  
匂はぬといふ袖もなし。殊に丹精恭しく。  
渴仰の志などが納受なからんや。神正に忠  
臣に與して。感應の手を伸べ擁護の眸を  
廻らし。主従の對面を一句の内に得せしめ  
給へ。敬つて申すと願文既に、納まりぬ  
フシ扱其の後に。地秀虎は神前を立去りて  
も。猶丹精を擻んで頼む徵を汀なる。蟹  
の小舟や神風に。任せて奥津白浪にこがれ。  
出づるぞ、三重、頼もしき。

地昔は巖窟の洞に籠められて。三春の愁歎

を透り。今は曠田の隣に棄てられて。胡  
狄の一足と恨みしも、エテ雁に故郷の便  
あり。地痛はしや百合若は、蒙古の大敵  
悉く攻滅し。玄海が島に凱陣あり。岩が  
根杖長陣に心身疲れかうくと。深く廢入  
り給ひしを別府兄弟情なくも捨て置きて。  
百合若は討死と上を霞の離れ島。船の渡  
海を警めてエテ世界の便絶えぬれば、フシ  
冥途も。同じ浪の上。地一歳出陣に。關山  
崎關戸の院の拜殿の假寢の夢。思へば神の  
告なりし。地彼奴ばら討つて棄つべきもの  
をとて。悔むにかひも荒磯の藻屑にかゝる  
露の身も。あればある世の習かや。所は纒  
か此の島に。草木だにも稀なればまして五  
穀の種もなし。朝の日も海より出で。夕も  
海に入るなれば。月の出づべき、フシ山もな  
し。地波の聲雨の音。春の嵐秋風夏をだ  
に分かざれど。指に日数を數ふれば。四歳  
と明し暮さる、フシ愛き命こそつれなけれ。  
地されば盡きせぬは夫婦の緣一夜を添はぬ

聊か我が身の爲ならず。八幡宮の御蔭にて

立花も。百合若を戀ひ慕ひ漁船に焦れ乗り  
給へば。けにも結ぶの神風にや此の島に吹  
寄せ。不思議に夫婦對面あり愛を語らふ苦  
楚。早若君を誕生あり還城丸と名を祝ひ。  
日數許りにいつしかもフシ節分知らぬ三歳  
なり。地殊に立花女工の手利。柳の皮を叩  
いて紡み績ぎ。木の根を。搾り色々に。絲  
を染めて機を織り木の葉を綴りて縫物し。  
親子の肌を隠すにぞ、ノルフシ身は習はしの。  
汐風や。尾花の綿も寒からず。妻子に慰む  
折々は。フシ故郷忘る、便なり。地扱鷹の  
羽の鎗矢を庵の内は恐ありと。洲崎の山の  
松蔭に手づから黒木の宮居を結び。鷹八幡  
と勸請し。我が子の武速長久とオクリ今日  
も、祈りて歸らる。地待ちかねて還城丸  
父よくと走り出で。丸をも連れず父ばか  
り何方へお越しぞや。母上は機織りて忙し  
いとて抱かれもせずエテ寂しきよとて縫り  
つく。地母が機も父が神に詣つるも。  
聊か我が身の爲ならず。八幡宮の御蔭にて

追付け都に立歸り。本領に安堵し、綾錦を肌につけ。木木の葉の手紙を脱がせたき念願なりとありければ、いや都とやらんは恐ししなう模様。綾錦といふ様な穢い物は着ともない。この様に赤いや青いや美しい。木の葉が着たいと泣きゐたる。フシ身のそだ。ちこそ哀なれ。母は機の上ながら、蘆の漉しを押明けて、ヲ、愛しの者やな泣いそよ。島より外を知らぬ子の。フシ理や道理やな。和御前に織りて着せんとて、磯山陰の吹寄を。播葉め置きたる柏に根笹織交ぜ。襦袢の服葉を縦横に。紅い着物織りて着せうの。歌今織るはまた。父の殿御の階衣。肩に紅葉の濃き淡き朽葉を交せて。フシ織重ね。フシ萩と芒を。織遠へく。織亂したる其の中に。秋鹿が。妻戀ひかねてかいろと。鳴くはしをらしや鹿さへも妻故死するに我が身は。何と憎の葉の合ノ手地露より仇の契かや、棧を投ぐる間の世の葉も。子故の闇と。哀なれ。立花機より下り給ひ今朝驚を聞

くにつけ。日数を数ふれば世は正月の頃ほひなり。若が生先初春の儀式を祝ひ給へとあれば。ヲ、我もさは思へども何を祝はん様もなし。遠城丸が武運のため。敵退治の事始。弓始せばやとて。山檜の丸木の弓に藤蔓懸け。汐風に節荒れし五寸周の野面竹。鯨の髭を三羽に矧ぎ。矢先を焦して引削ぎに切つたる矢。取つてからりと打番ひ磨なければ當年の。惠方は知らねども、椀飯も歳徳も。本國こそは惠方なれときりくく引絞り。暫し固めてかつきと放し。千秋萬歳いよくおう。ヲ、目出度しくとフシ三度矢聲を擧げ給ふ。北の方も喜び遠城丸。御身も父御の弓勢に肖る様に。八幡様へいざ参らう留守を頼み参らす。サア起しやと擡負ひてオトリ織邊へつたひに出でらる。フシ思ひもよらぬ。島陰に小舟潜寄せ大響あけ。此の島に百合若殿と申す大將の生仔らへてや在します。市郎丸秀虎参り候と。呼ばはれば百

合若浪打際に走り出で。やれ秀虎か我が若か上る間返しと舟引寄せ。手を取り給へば秀虎も變り果てたる御姿。夢かと見上げ見下して。フシ只潜々と泣きけるが。別府兄弟君討死と奏聞し。御本國を横領し。奢十分に餘り候所に。實に天に口なし人を以ていはしむとかや。百合若大臣は存命にて。遠き島にまします由誰がいふともなき風説。そこはかとなく尋ね出で殿島にて整人の。小舟を奪ひ命を鯨鯢の鯛に懸け。千里の波に漂ひしに。遙の沖にて此の矢一筋飛び来り。御覺候へ舟の船先にはつしと立つ。連れ此の大矢遠飛びさせて射んずる射手。我が君ならで日本に覺なし。此の矢の来る方にこそと兩を指して漕ぎ行けば。霞の際に物こそ見ゆれ。雲か山かやあれこそ島よ懐しや。見外すまじと櫓權を早め。押せどもく舵子楫取の身ならねば心ばかりは懐れ船尋ね寄りたる有難さ。思へば此の矢は正八幡主従の縁を示しの矢。

不恩讎にも御容顏拜み奉る嬉しさは。未だ  
誠と存ぜずとエヌア又涙にぞ咽びける。由實  
にも此の矢は百合若が今日弓始に放ちし  
矢。さらば海へも落ちずして御分が船に立  
つたる事。地賊の心奪竹の。竹も哀を知る  
かとして、フシ御落涙は限りなし。地探立花の  
御身の上若君儲け給ふ事。憂が中の慰と。  
語り給へば秀虎横手を拍つて。其の立花  
の御方は。我が君の御事戀慕ひ憧れ死と承  
り、及びしが地探は人の噂にて若君迄御誕生  
は。御出世の瑞相一日も此の島に御逗留無  
益の事。殊に海上日和も良しあの御船に秀  
虎が。櫓を押切る程ならば九國の地迄は一  
刻に押付けん。先づ若君に御目見え申し度  
し。ヲ、たつた今八幡へ母が連れて参りた  
り。呼返して日の中に歸國を思立つべし  
と。勇みく出て出で給ふ秀虎座を見廻し  
て。鬼神をも取極く兩國の大將の。四年  
三年の御住居さぞ口惜しう思すらんと。獨  
言して立つたる所に。妻戀ふ雄子の伸羽し

て暫し通るゝ命の露。フシ小笠が腰にぞ隠れ  
ける。地探は此の島にも獵人のありけるよ。  
目前の殺生助けやらんとせしうちに身には  
木の葉の色ある女黄なる眼に笑る爪。雉子  
を追駆け此處彼處在處を捜すその勢。さ  
しもの秀虎ぞつとして。軒端の松に攀登り  
フシ息を詰めたるばかりなり。地雉子は命を  
通れんとばつと立つてはかつぱと落ち。亂  
れ蘆邊の花芒、フシ踏折りく押分けて。悲  
む聲はけんくくく。けんくく。嶮岨を追駆け。  
くく。追詰めて。引掻い搦んで巖に登  
り。引裂き喰ふ其の勢秀虎も身の毛立ち。  
扱は此の島大魔所にて是ぞ天狗の女房なら  
木の葉天狗といふものか。なう母様母様と  
んと。フシ鼻に目を附け居たりしが。地三才  
許りの天狗の子。是も木の葉を身に着たる  
跡を暮ひて泣き叫び。母の顔を一目見てあ  
れ母様の怖い顔。爪も長うなつた怖くく  
と泣く聲に。母も驚く殘害の。一念醒めて容  
顔もフシ柔和の相とぞなりにける。ヤアあ

の子は何が怖い構へて構へて父様につが  
もない事いやんなや。地いざ添乳して寝ね  
せうと。近付けば振切つて。ア、母様丸も  
喰はうといふ事か。もう堪へて下されと座  
の内へ逃げ入つて。フシ技折戸。はたと押立  
つる。あさましや悲しやな年月包みしかひ  
もなく仇なる形を、フシ見せけるかや。雉子  
は妻故身を果す我は引換へ雉子ゆゑの。餌  
に姿を見付けられ妻子の縁の切目となる。  
父御の斯くと聞き給は、今迄交せし契を  
も。さぞや悔しう口惜しう愛相つかしとな  
りやせん。包まる、だけは包んでたもせめ  
てま一度抱締て。我が子よ母よといひたい  
が七つ下れば目が見えず。歸るさも惑はし  
く父御のお歸りなきうちに。母は、これ迄さ  
らばや。ま一度顔を見せてたもと妻戸を敲  
き取付いてさらばくくの涙ながら磯山陰の  
木隠にフシ泣くく。隠れ失せにけり。地か  
くとも知らず百合若は尋ねかねて立歸り。  
秀虎々々と召さるれども。ヤア男の天狗殿。

我をして違る合點かと返事をせせず居たりしが、よくよく見れば鼻に胡散な所なし。秀虎これに候と飛下りて色を變へ。擧も

凄じや北の方と思しきが爪は鳥類眼は猿、雉子を追詰め引裂き喰ふ面魂。若君は庵へ逃込み給へば母も嘆く風情にて行方知れず候。世を離れたる鳥。鬼女山姥にも候かと、々委しく語りければ。百合若

大きに驚き。擧は此の鳥の魔怪立花を疾く取殺し。幼き者をも心懸け母が姿に變化して。年月我を識す思へば不便口惜しや。

世に出で、後の此鳥の天狗にもあれ惡魔にもせよ。妻の仇は取るべきぞ方々逗留無益なり。舟に乗らん遠城丸都へ行かんと宣へば、若君わつと泣出し母様に抱れすば。

都もいや角もいや木の母様返りしやいのとスツとどうと坐りて泣き給ふ。睡し兼て秀虎申し若君様、都へ上れば母上様に御對面、是非に都がいやなれば此の島に捨て置いて。

現今の様な怖い物に噴ませ申すと威せども。

いや噴まれても大事な母様置いては行くまいと。聲を上げてぞなき給ふエ、閉分もない。よし捨て、置け構ふなど秀虎に目交して。主從急ぎ船に乗りヤレ怖い事それ其處へとッ船漕ぐ眞似して威しけり。母ら

木陰に隠れるて。見遣り見送り嘆きしが今は雄へかね走り出で。母は爰にとばかりにて。抱上げ抱付き抱締めてッ涙に。聲も出

でやらず。稍あつて百合若様。全く自ら魔障にあらず。ありし昔の立花なるが。一夜も添はぬ思に臥し。此の世を空しく去りながら。鷹の羽の不思議にて。魂は香具山の。鷹の體を、ッ狩衣。これ御覽せ

と脱ぎ懸くる。袖は翼の羽を重ね。女妾と縁丸。フシ目も當しられず不便なり。果敢なやな三年が程。右羽に我が子左羽に殿御を寢せし時言も。今日といふ今日顯れ

て。仇となりたる翼の身。鳥類は様々の鳩に三枝の禮儀あり。鳥に反哺の孝ありとて。巢立して百日は、親鳥を養ふ孝行の鳥もあ

るぞかし。鷹は如何なる因果にや友を殺して餌食とし。雉の時より親鷹を掴み、スエテ食はんと狙ふゆゑ。地父母巢には寄付かず

フシ枝の上より落餌の。地不孝の鳥殺生鳥鷹は死ねども穂はつまぬと。人は褒めても悪業は落穂を拾ふ群雀に。劣つて辛くあさま

しき。鷹になつたる此の母が罪科が子に報い。和御前が出世の妨かと思の上の思となる。成人の後までも小鳥一つ蟲一つ。無

益の殺生せぬ事ぞや。鳥類製と思へども命の惜しいばかりかは。妻を思ひ子を思ふは人間にも勝るとは。今身になりて知つたる

ぞや母には最早逢はれぬぞ。母戀しとばし思ふなよ夜も父御と寝ねしや。父の意見

を能う聽いて大人しう成人し。世間を知らぬ鳥育とて人々に笑はれ。戮られなッシ名

殘惜しやいとほしや。地難や此方寄れと。涙に濡れし翼にて。播寄せく播無てて。羽交の下の温鳥。ッ恩愛こそは哀なれ。百合若泣く、聲を上げ扱は此の世



さき人の生を變へて契りしかや疾に斯く知らせなは。今更何を喚く。き此の日の本の皇孫も神母方は龍女にし。鱷のありし帝あり寶公太子といふ智者は。鴨の巢より生れ出でて其の外例はあるものを。恥も恥辱も更になし契は忘れず此の儘にて。本國へ伴はんと船飛上り。縫り付かんとし給へば。恥しや人界の。契は是が限ぞと翼を立て、ばつと立ちなう。今暫し〜とて彼方。此方へ追鳥の狩場の時雨涙の雨。巖の方に飛上り鳴き。交したる敏應の野守の鏡目には見て。手には止らぬ妹背の中思ひ遣るにも哀なり。地秀虎涙を押し拭ひ沖の方をきつと見て。胸念ぎ陸に駆上り喃れ御油斷候。あれ磯間近く漕ぎ來るは蒙平古が船と覺えたり。地一支仕らんといひもあへぬに異國船。聞を作つて漕寄せ。矢先を揃へて射掛けしは霧を撒くが。三重の如くなりッシ母は我が子を。地射させじと來る矢を翼に打拂ひ〜。羽交の下に掻抱きッシ林の内へぞ忍びける。其

の際に百合若例の入り取つて番ひ。五音も通じぬ畜類め詞を掛くるは費なり。是ぞ百合若人臣とは矢先に思知れやとて。しつはと保つて放つ矢が。船腹に發矢と立ち船板三枚颯と割れ。地潮漲り漂うたり秀虎得たり賢しと。人手を伸べて雜兵ども引揃んでかつぱと投げ。引寄せてはどりと投げ浮きぬ沈みぬ流るゝ間に。大將と思しきが後の岸より這上り。百合若目掛けて打つてかかる秀虎隔て、むんずと組み。一締締めて面を見れば別府が弟雲住なり。汝が無用の唐人笠蒙平古にあらでびつくりよと。上帯解いて括上げ。我が手に掛くるは易けれども君出船の御祝。サア遊せと引出す。いや我ばかりは大人氣なし。敵は一人味方は二人脛を持って秀虎と。細首をしかと把り。兩方一度にゐいやつと。地首と胸とを引裂いて。海へさんぶと投込みしッシ力の程ぞ頼なき。地時刻移さず船出せん遠城丸は何處にと。夕の空に縁丸實の鷹の羽交の下。若君抱

さし置き雲井遙に照る月の。郡の方に羽を伸して飛ぶを日常の船の中。浪に揺られぬ百合若の召したる船は筆や。出世は千里一跳の仕合。丸とぞ名付けける。

第四

地人に従ふ者は存し天に逆ふ者は亡ぶとかや。別府の郷武者雲足は主君の本領を横領し。權柄九州に發り自ら別府親王と名乗り。賈人の衣冠を身に纏ひ。館に金銀珠玉を鏤め。相従ふ者ども五島大納言百貫猛中納言石風。其の外田夫無道の郎等迄。或は中將宰相と官位を許し召使ふ。冥加の程も憚らぬッシ身の奢こそ危けれ。地されども弟雲住を百合若退治に差向けし。未だ其の便なく殊に府内親子の者。行方安否知れざれば四方に敵を持つたる心。起臥立居食物迄に用心し。門より外に他行せず。形は榮華に誇れどもッシ心は牢舎の苦みなり。地百貫大納言罷出で。御武運強き我が君へ申すも愚に候へども。人の身の榮華と申すは月見花

見遊興。扱は野遊川逍遙。浦山の風景こそ  
樂とも申すべけれ。は御身の御用心と御門  
外へも出で給はぬ如何にしてもいたはしく。  
大國數多御持ちながら國を取らぬも同然と  
存する。所に當國小倉の町に。櫻葉と申す  
女の盲目。五音に通じ鳥獸の聲をも占ひ。  
人の胸中に包む迄察するに。一點も違はぬ  
指巫子と承る。彼の女を御側に置かれなば  
何處へお出で候ても。御用心に於ては氣遣  
あらじと申しける。地別府聞きもあへず。  
ム、それは重寶々々疾くく召せと纏てオッ  
リ使を立てにける。地もとより古老の別府  
なれば如何に方々。其の女とて油断ならず  
定めて作盲ならん。心を付けて試して見  
よ。敵の廻者ならば一刻に責殺せと。廊下  
一間切離させ下に炭火を貯へ。用意様々な  
る所へ松が枝は夫のため。敵に近付く謀。  
身を盲目に杖つきの。フシ逃れ難なく見えに  
けり。櫻葉參り候と手を引き御前に出で  
ければ。各一度に押取廻し兩眼に目をつけ

て。少しも開かば捻伏せんと心を許す隙間  
もなく。鼻の先へ握拳をぬつと出し。面  
を張る眞似をしつ抜身の鎧を閃めかす。松  
が枝細目に見けれども爰ぞ大事と堪忍の。  
心は消ゆるばかりなり。稍あつて。別府大  
聲上げ。爾やあく櫻葉。汝五音呂律に通  
じなば。我が身の上をも知るかといへば。ア  
アさればこそ。陰陽師身の上知らず妾は元  
四國の者。七歳の時彦山の天狗に擲まれ天  
狗殿より授けり正直の占。眼が明いては面  
々の身の慾に絆されて。心曲りて占に私  
がある故に。眼の光を消すぞとてそれより  
ふつうに目も見えず。地我が身の占は變程も  
えきかず。人の上の善悪は人相相生れ性。  
心の中にある事失せ物待人走者。望み事願  
ひ事夢判夢合。鳥啼鳶鳴雀の小躍の  
道切。厨の隅の軸廻鳴き。犬の長啼お爺の  
長欠伸。釜の鳴る聲薪のさつしよ。豆腐の  
ぐつ煮豆殺のばらく迄。五音は愚句臭い  
でも。一分一點違なしと。フシ有りさうにこ

を申しけれ。別府重ねてチ、さもあらん。  
扱某が人相は何とく。櫻葉細目に一  
寸見て小首を傾け考へて。只今のお聲は  
五音の内の宮の音。喉に響いて土性の調子  
しかも深山の土。聲にちと苦味あり。土に  
苦味のあるものは草薺の性。お顔の内はむ  
しやくしやと。髭がたんとある筈。フシ違ひ  
はせまいと言ひければ。地是は奇妙と一同に  
手を打つてこそ感じけれ。すは口拍子に乗  
せて來た是からは我が物と。ア、お目出た  
や草薺は仙人の食物。御壽命は千年。さり  
乍ら仙人はところを練り。鉢盤とす。碁は  
敵味方の争ひ人の地を取り濱を取る。十分  
に勝誇つても只一目の手違ひにて勝が負に  
打かへ手。傾く運の廻鳥にかゝり。四つ目  
殺の四方の敵に取巻かれ。生石なしの目は  
白黒との占形。フシ御用心と言ひければ。地  
別府も思ひ當りしがなほ試さんと太刀押取  
つて。サア爰に一人あり。男か女か氣質は  
如何に。聲を聞かずに香をきいても知ると

いふ。はや占へと言ひければ。ム、此の人は誰方かは知らねども。身には金銀着飾つて心の中は恐しい。人を殺さう〜といふ念絶えず。地お側に近う斯様の人入らぬ物と合すれば。皆々感じ叫く中より酒樽一つ取出し。同サア爰へ出た人心はへを指して見よ。櫻葉一寸見さて〜此方は結構者。上人にも下人にも。憂へにも悦びにも此方無うては叶はぬ人。さりながら一つの瓊。地附合ふ人に金遣はせつひ氣遣にしてのけつと。言へば各我を折つて。フシ奇妙々と騒けども。別府未だ疑晴れず。侍分の者どもは生心あるゆゑに向ふの心に徹するなり。無念無想の下部ども。地占はせよ承ると。下臺所の仲間ども。銅の茶瓶を提げ。サア此の人の年恰好心だてはと問ひければ。ヲ、其方は好い年なればこそ。頭は禿頭人體は良けれども。口が差出て朝夕に。ちやは〜と嘔しい。フシ癖がある。とぞ申しける。地さあらば此の人占へと播

鉢に播粉木を添へ。一人か二人か如何に〜と言ひければ。同ム、是は兩人しかも女夫男と女子。お内儀は嘔しうがら〜から〜聲高に。亭主は御前へ丸裸で慙無い。形やと言ひければ扱も見通し名人と上から下に感ずる聲。扱も揃うた呆氣者。フシ可笑さ堪へ兼ねにけり。地されども別府は只兩眼に心をつけ。なほ尋ねたき事どもありと奥座敷に座を變へて。是へ〜と呼びかくるあいと答へてそつと立ち。微かに見れば廊下の板敷切落し。下には饑然え上る南無三寶。よけて通らば目明きなりと咎められ。巧みし事のかひあるまじ落ちば忽ち燒け死ぬべしと。心も後れ足許も跡へ〜と引戻す。エ、我ながら卑怯なり。夫に違つたる一命我が身體も我が物ならず。骨も皮も焦け付いて炭ともなれ灰ともなれ。夫に代つてお主の忠義此の時なり。我は眞の盲ぞと思ひ切つて行く足の右をかつばと踏み外しとど落つれば悲しやと。呼ばはる聲

も縁に咽び兩手をかけて上らん。〜とすれども足は踏みもためず。只おう〜と喚く聲。フシ地獄の呵責と謂つべし。地別府手を取り引上ぐれば。水を濺ぎ樂を與へスエテ漸く息を繼ぎけるが。地さりととは懐き殿様や目かひの見えぬ女の身。科あらば一思の殺しやうもあるべきに。苦痛を見せて燒殺す御憎しみは何故と。フシ恨み怒りて泣き居たり。地さしもの別府疑晴れ。ヲ、誤つたり〜。百合若一家に用心し若しは作り盲かと。疑の念面目なし詭言するぞ恨むるな。今より側に引つ添うて人の心を見通せば天下も廣く氣遣なし別府が實は汝ぞと。地心許して打解くれば仕濟したりと嬉しさに。熱さ痛さも打忘ぬ敵持つたる御身からは。疑も御尤自らお側にあるからは。鐵の城郭に籠つたと思召し。何方へも御出なされども。氣遣なしと偽れば。ヲ、同希い〜。地直に明日は領内へ遊山に出でんと喜びしを。ア、申しさり乍ら。同先程五音を聞い

た内。人の心を亂らし氣違にする人など、必ずお供に御無用といへば、別府打笑ひ。

いやそれは人では無い酒樽ぢや。遊山に是は地外されぬ。明日早々迎ひをやらん歸つて休息々々と。我が身の敵を我が手引く連

の末とぞ、三重見えにける。悪文次秀景は、妻の松が枝身を碎きやう／＼別府を誰

りつけ。今日は敵が領内の遊山に出づると聞きければ、扱こそ本懐時orerりきもあれ

廣き國の中、何方へ出づるぞと。景よき浦々山々をオクリ忍びて、尋ね廻りしが、地花

火山の麓、三町が間に、大幕打たせ場取つたり。嬉しや、爰に、梅つたり未だ別府は來らぬ體。道にて討つて棄つべきか、いや／＼

妻の松が枝合圖あり。せくまい／＼と思ふ程。なほせきかけて立ちけるが後の方に聲

あつて、調暫し／＼と呼びかけ父の秀主追つかけ來り。ヤア後れたるか秀景、君御歸國

あつて密に軍勢を催し。近日別府誅伐の御用意あり。弟の秀虎は雲住を討つて君の御

供申したる。働によつて助當を赦したり。己れに刀を盜まれて我町人となつたるは、己れが武士を立てん爲今迄のめ／＼と手をあけて、軍の場にて別府が首人手にかけさせ。其の方は見事生きて居ようか。よし其の方は兎も角も刀を指さぬ此の親が、人に面が合されうか。生抜の町人にしてくるか口惜しや。サア刀を取返す己れには、秤か似合つた。刀を返せと睥めつくる。兩眼にはら／＼とメキ無念涙を流しける。秀景至極し御尤々々。我等も左様に存する故、今朝我が君の御目にかゝり、今日中に別府が首實檢に入れすんば、秀景夫に首提げられんと申し切つて候。地今日一日とも申すまじ今一時が間に。本望を遂げすんば御存分に成り申さん。調ヲ然らば一時相待つて首を見すば刀を捻ぢ秤を指さするが合點か。地如何にも／＼刀を返進仕らん。ム、頼もしし何にも／＼刀は一腰指し手は二人。親が指すか子か指すか今一時の勝負ぞと。詞を番うて別

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

れける親子の。養理こそ三重の、しけれッス。斯くとも知らず。雲足は櫻葉を頼みに、供も僅かに悠々と。花火山の遊山として、幕の内にぞ入りける。地やがて果物酒肴別府、盃傾け。これ櫻葉我世を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふも、お事が陰、今日調子に氣違なきか心に、かゝる事あらば、知らせてくれと言ひければ、いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き日出たき調子、殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿様の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悦び遊はせと誠しさうに申すにぞ。別府ほとんど悦び。此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一日拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候へし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。ヤア、占が違

し、全くお側は退かじといふ。別府氣色を  
損じ神同然の櫻葉を疑ふは奇怪なり。地は  
や立去れと睥めつけられ、フシ是非なく、立  
つてぞ歸りける。地時分は好しと女房さあ  
らば清めの香を炷き、仙人を待ち申さんと  
オラ合圖の香は、ほのくくと、フシ梢に落  
つる。山風の、木の葉衣や頭の雪。翁姿に  
鳩の杖。スエテ仙人顯れ出て給へば。地別  
府は頭を地に着けて、フシあつと禮するばか  
りなり。地面白や人も今、心知らぐ折を得て。  
國は常磐の時つ風、フシ民の草木も靡き合ふ、  
世を久しかれ長かれと、地月宮殿を立出で  
て、翁が千秋萬歳の齡を汝に譲るぞや。而  
目や嬉しやと立ち舞ふ様に見えけるが、髪  
も豎かなぐり捨て、つと密つて別府が  
胸ぐらしつかと取り、隠せし刀を胸元に  
差當て、百合若が執權府内の太夫が嫡子。  
悪文次秀景見知つらんと呼ばはれば、地  
櫻葉兩眼くわつと開き同じく女房智恵も右  
馬の松が枝とは我が事。ようも燒傷をさせ

をつたと、シ頭をはるぞ心地よき。コエ、  
別府恨めしい、譜代御恩の我が君をよくも  
島に棄て置き、三年四年の御物思ひ。己  
れは縛羅錦緋を身に纏ひ、主には木の葉を  
着せたるな。今我が着だる木の葉こそ島に  
て君の御裝束。是にて己れを討たため申  
し受けて着したり。我が君の御憤、我々  
親子夫婦が驚憤、御家中上下十萬餘騎の、  
恨の念力此の切先に覺えよと、判通さんと  
する所を暫し、悪文次、此の別府が十  
悪五逆天道よりの縛め、白業自得は今思ひ  
當つて人を恨みす。驚かす。さりながらと

踏ませ申し、地其の後君の御手にかけて首を  
召され候はば、少しの罪も遁るべし情には  
我が君の御手にかゝり死なせてくれと、  
シ手を合せてぞ歎きける。ム、おせめても殊  
勝の言ひ分ながら、我も親子の義に討ち我  
が手にかけてねば叶はぬぞと、地突通さんと  
せし所に父秀主飛んで出で、叫やれ待て秀

景御分が武勇は見届けたり。彼奴が願ひら  
殊勝なり御腹癒せに計らはん。地暫く待て  
と言ひ捨て、フシ飛ぶが如くに断辰り。地  
百合若の御供して秀虎諸共馳來る。リア願  
ひ叶うた有難しと罷り出で、首討たれよと  
突放せば別府ひらりと飛びしさり。コア、  
愚かなりとて死なん別府が。おめくくと  
首さし伸べて討たれんや。最期に百合若己  
れを一目睨んで死なんと思ひしに、よくも  
是へ出でたるな、猛百連下り合へやつとど  
よめけば、二人の郎黨山陰より一文字に  
切りかゝる。地別府は百合若組留めんと。

右手を掲げてかゝりけるをつつと入つて  
左手を伸べ。願、掴んで差上げ、二三遍引  
廻しかつらくと笑ひ、日本無雙の百合若  
が目の覺めたを知らざるか。己れを切る刀  
は無し。先祖鎌足入鹿を討たれし例に任  
せ。只今山の草刈に借つたる鎌の鹽梅見よ  
と。ふいやと引かけし、ぎれば、地さすが

に鈍き錆鎌も大力の腕先にて、フシ首は前ハ

馬の松が枝とは我が事。ようも燒傷をさせ

ぞ落ちてけり。又またに血ぬらず戦はず勝つは誠の勝鬨や。響ひびあり馬の松が枝が智恵の首くびは千人前。目明きの力も千人前千人萬人ひと々人の。人々引連れ國入の御大。將とぞ仰ぎける。

## 第五

梓弓あづまゆみ大和島根は押並おしなべて。君に靡なきの民草や百合若再び歸洛きりやくあり。冬嗣公の御執ごしつ奏。

還城丸を先に立て。府内親子松が枝をも相具して一先づ參内ありければ。堂上堂下同音に。さながら蘇生そせいの如くなりと。フシ御悦ごえつびは限りなし。地ち百合若庭上に跳ひぎ。

蒙古退治の軍の次第書付を以て奏聞し。切取る所の彼の國の財産悉く。御階ごかに積ませ献上ある。異國の軍に勝利を得。それより下人別府が逆心によつて。立海が島に漂泊ひょうぱく致せし所に。不思議に歸國仕る事聊か武勇に非ず。地ち鷹の羽の矢の擁護ようごの奇瑞きせき。死したる立花生たけなを變へし妹背の中。此の子を儲け候と一々言上ありければ。歡感甚だ淺

からず。則ち還城丸を。太宰の大貳に任じ。

九州二島を司り。母立花は字佐の官の末社

に齋いひ。縁の宮と崇たかむべしとの繪言えいごフシ世

に例なき面目なり。地ちかねて歡聞に達せし

府内親子が忠節。是亦感じ思召し。各五位

六位に補せられ。有馬の賤しづの女松が枝と

やらんには。猪名野といふ呼名を賜はり。

地ち女に稀なる志有馬の者とあるからは。世上

の女の樂ぞとフシ御戯れぞ有難き。百合若

重ねて。縁丸の鎗矢を本國宇佐の宮に奉納

し。毎年恒例の祭を企て山鉾を飾り。都より

俳優の藝者を呼び下し神慮をいさめ候。あ

はれ宣命下されば。生前の本懐と恐れ入つ

てぞ奏せらる。歡感殊に麗はしく神は人の

敬ふによつて威を増し。人は神の恵みによ

つて運を添ふといへり。神妙の大願天下太

平の勅願のため。宣命使を立てらるべし早

やとくくとの勅詔にて。大外記少外記史

生の官百合若と打連れて。花の都を發向ある是ぞ稀なる物見とて。近國遠國京田舎老

若男女の參詣や諸願かけ奉り客鼓太鼓の難

子物。笛のこゑこゑひやりらり遊衆。ちや

んぎり四季の花紅葉。所望しよぼう猛勢まうせい群集ぐんしゅうをなし。

悦び勇む有權は目出度き。御代の三さん重しし

るしなり。フシ神輿をいさめ。地ち奉れば宛然

神も納受の。心を氏子に告げ白羽の鳩。八

幡の御神體ありくと拜まれ給ふさてこ

そ。國土安穩に五穀豐饒の春永に。猶新春

の御吉慶と民は。悦び重ねけり。

右此本我等かたり本の通寫させ進じ

申候ふし章とてさのみむつかしき事

は無之候文句。ほど。拍手をよく

く心がけ。たゞ人の心をなぐさむ

るが秘事口傳とや。はし

竹本筑後掾

大阪北久寶寺町 正本屋仁兵衛團